

爰に百萬兩分限と呼ばれ
 たる仇氣屋の獨息子^{ひどりむすこ}を
 艶二郎^{えんじろう}とて、年も十九や二十
 といふ頃なりしが、貧の病は
 苦にならず、他の病のなけれ
 かしといふ身なれども、生得^{しやうとく}
 浮氣な事を好み新内節の正本^{しやうほん}など
 を見て玉木屋伊太八、浮世猪之介
 が身の上を美しく思ひ、一生の
 思ひ出に此のやうな浮氣な浮名の立つ
 仕打^{しうち}もあらば、行々^{ゆくゆく}は命も捨てようと
 馬鹿らしきことを心がけ、命懸けの思付^{おもひ}きをしける。

「かういふ身の上
 になつたら、
 さぞ面白からう、
 よい月日の下で
 生れた手合だ。」

艶二郎は近所の道樂息子北利喜之介、
輪留井思庵といふ太鼓醫者

なぞと心安くして、

いよく浮氣な事を

工夫する。

「まづめりやすといふ奴が浮氣にする
奴さ。こいつを知らねばなりやせん。

凡そ人の知つた口近いめりやすの分、

小口の所を申しやせう。まづ雉子、

無間、盃、時酒、ゆかりの月、

三つの鳥、三つ布團、二つ紋、四つの袖、

禿立、沖の石、花の雲、朝顔、六歌仙、

小町、遍昭、黒主、業平、康秀、白糸、

獨心中、指切、入黒子、起請、昔草、

萬年草、十三鐘、水鏡、稻舟、待宵、別れ、

名残の紅葉、假枕、夏衣、春の夜、秋の夜、萬寸鏡、

○ 浮氣物語
伊勢物語



「とんでもなく
浮名の立つ
仕打があ
りさうな
ものだ。」

夜半の鐘、朧月、春霞、亂れ鳥、思ひ川、女參宮、「引裂日に口紅の

元服、萬菊、九月蠅、吉野草、夏の月、明烏、

むら烏、扇、花の香、花の宴、残る暑さ、さし櫛、

相の山、とけず、染糸、冥土の烏、戀櫻、

秋の七草、二つ文字、左文字、我心、

江戸浴衣、疊算、一つみぞ、

戀話、まだいつくともあれど、

一寸した所が此位なものさ、

ア、口が酸くなつた、文の文句

には大分傳授のあることさ。

絨をつけぬと縁が切れると

申しやす。文の末へ

雅名を書くやうになると

むづかしいね。

ついでるの

は、何時

でも地者

の文ではねえのさ。

どねえに地味でも

妻一休書



耳のわ
きに枕
肝脈の
あるので商賣
上りはソレチ
きに知れやす。

艶二郎は先づ刺青が

浮氣の始りなりと、

兩方の腕、指の股まで

二三十程

あてもなき刺青をし、

痛いのを堪へて、

此處が命だと

喜びけり。

「色男になるも
とんだ辛い
ものだ。」



「中にちと
消えたの
もなくて
は悪いか
ら、あと
で又灸を
据ゑ
やせ
う。」

艶二郎は役者のうちへ、

美しき娘などの駈^かけ込むを

浮氣なことゝ

羨しく思ひ、

近所の評判の藝者

おえんといふ踊^{をどり}子

を五十兩にて雇

駈^かけ込ませる

つもりにて

輪留井思庵

頼み来る。



「これが頼みの、
兎も角もおあや
かり申してちと

出世の
筋き。」

「駈^かけ
込むばかりなら
随分承知さ。」

家内の下女共覗き見て、
 おらが若旦那に
 惚れるとは
 千家か、古流か、
 遠州か知らぬが、
 飛んだ茶人だと
 さやく。

一みづからと申すは、
 抑寄邊定めぬ轉び妻、
 この新道に住馴れて、
 人の心を浮氣にする
 白拍子でござんす。

茅場町の夕樂師でござんす。



番頭候兵衛
 「若旦那の
 お顔では
 よもやかう
 いふ事はあ
 るまいと思
 つたに。
 コレお女中
 間違ひでは
 ない
 かの。」

艶二郎さんを植木の蔭から
見そめました。

女房にすることが
ならずば、おまんま
なと炊いても
居りたいのさ。

それもならぬと
おつしやれば、

死ぬ覺悟で

ござります。」

など、注文通りの
臺辭を並べ

たてる。

「ハナ色男といふ者は、どんな事で難儀をしようか知れぬ
ものだぞ。もう十兩やらうから、もちつと大きな聲で
隣りあたりへ

聞えるやう頼む／＼。」



艶二郎が親
彌二右衛門
頼んだ事は
知らず、氣
の毒に思ひ
いろ／＼と
意見して
歸し
ける。

この噂

さぞ世間で

するだらうと思ひの外、

隣でさへ知らぬ故、

張合^{はあひ}抜けがして、

讀賣^{よみうり}を頼み

此譯^{わけ}を板行^{はんかう}に起して

一人前

一兩づゝにて

雇ひ、

江戸中を

賣らせる。

「評判々々、仇氣屋の息子^{うぢきやのこ}艶二郎といふ色男に、美しい藝者が惚れて駄込みました。とんだ

事^{こと}、事明細々々、紙代板行代に及ばず、

只ぢや〜。」

「何さ、
かたも無い
事だのさ。み
んな拵へ事さ、
只でも讀むが
面倒でござん
す。」



艶二郎噺をするたび、
世間でおれが噂を
するだらうと思へども、
一向に町内でさへ
知らぬ故、此上は
女郎買を始めて、
浮名をたてんと思ひ、
仲の町浮氣まつ屋
へ來り、輪留井思庵
北利喜之介なぞ
かみにつれ
一杯に洒落る。



女「瀬川さんと歌姫
さんのうちをきくに遣し
ましたが、さつき小松屋
でこのも見
かけました
から、歌姫
さんはてつきり
お悪うござりま
せう。」

「木挽町
で高麗屋
が墨河さ
すんを
さうご
でさ
ねます
に」

艶二郎は、
 浮名屋の浮名といふ
 手のある女郎にきめて、
 十が十ながら
 惚れられるつもりにて、
 一杯に見得をし、
 襦袢の半襟ばかりいぢつて居て、
 色男もさてくゝ氣の
 詰る事なりと思ふ。

「茶をいひ
 なんすな、
 拜みんす。」



「モシ花魁、お前を世
 間ではとんだ手のある
 女郎だと。」

「大黒屋ぢや
 アねえが、
 何ても女郎
 衆の
 總の
 録だ
 ね。」

艶二郎女郎買に出ても
うちへ歸つて妬もちを
やく者がなければ、
張合がないと肝入を頼み、
やきもちさへよく
妬けば、容貌は
望まぬといふ注文にて
四十近い女を、
したゝか金二百兩
にて妾に抱へる。

「去年の春中洲で買った地獄
てはねえか知らん。」

「小便組
などいふ
ところは
御免
だよ。」

小幡无用

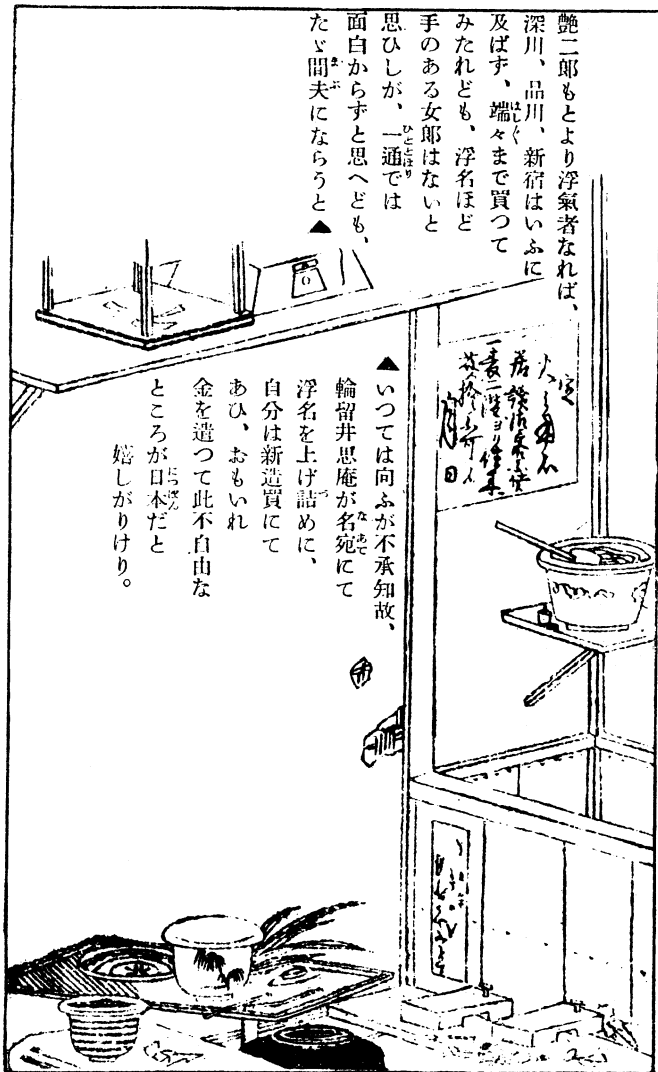
花の書



「わたしをお抱へ
なされましても、
大方女郎買や
色事でわたしを
お構ひなされます
まい」と、もう少
し手見せに妬き
かける。

艶二郎もとより浮氣者なれば、
 深川、品川、新宿はいふに
 及ばず、端々まで買つて
 みたれども、浮名ほど
 手のある女郎はないと
 思ひしが、一通では
 面白からずと思へども、
 たゞ間夫にならうと ▲

▲いつては向ふが不承知故、
 輪留井思庵が名宛にて
 浮名を上げ詰めに、
 自分は新造買にて
 あひ、おもいれ
 金を遣つて此不自由な
 ところが日本だと
 嬉しがりけり。





艶二郎は家櫻を思ひ出し、
 「かへるさつづける大櫻、口舌の蒼（あざ）ひし
 袖を、禿（かぶ）が力草（ちからくさ）
 ひかれて行くや後髪（ごみ）
 心強くも桐（きり）が谷（や）といふ
 文句（ぶんこう）より外の客人（きやくじん）の
 捉（と）まるを羨（うらや）しきことに思ひ、
 何（なん）の事（こと）もないに、
 新造（しんぞう）や禿（かぶ）を頼（たの）み、
 こつちから大門（おほもん）につけて居（ゐ）て捉（と）り、
 羽織（はおり）位（くらい）はひつさけても
 大事（だいじ）ないといふ約束（やくそく）にて、
 引（ひ）きずられて行く。

「これさ、まあ、
 放（はな）して呉（くれ）れる。かう引（ひ）きずられて

行く所（ところ）はとんだ外聞（ぐわいぶん）がいゝ。」



新造（しんぞう）禿（かぶ）は
 人形（にんぎょう）を貰（もら）
 ふ約束（やくそく）に
 てむだを
 いひく、
 引（ひ）きずつ
 てゆく。

艶二郎五六日振りにて

うちへ歸りければ、
待ちまうけたる妾、

此處を奉公の仕どころと、

かねて服して置いた

存分をやきかける。

「ほんに男といふ者は、

何故そんな

に氣強いも

んだねえ。

それほどに

惚れち

れるが

嫌なら、

そんな

いゝ男

に

「恥しいこつたが、生れてから初めて焼餅
をやかれてみる。 どうもいへねえ心持だ。」

「もちつと
頼む。」

きききき

生れつかねえがいゝのさ。

また女郎も女郎だ、

人の大事の

この八丈と

縮ちり
が来て

の事さ。

「もちつとやいて
くれたら、手前が
ねだつた八丈と
縮縮縮を買つて
やらう。」

男を留めて
置きくさつ
て、又お前
さんもお
前さん

なす
想
つた
が
い
さ
と
先
と
き
に
仕
や
せう

江戸艶生氣權焼

艶二郎は役者女郎
 などの心意氣にて
 回向院了の
 お開帳へ
 提灯を奉納せん
 思ひ、浮名と
 手前の紋を比翼紋に
 附けさせる注文
 にて北利喜之介請合ひて、
 田町の提灯屋へ誂へける。



中屋へは手水手拭
を誂へ、これも

比翼紋にて、所々の

流行神、随分日に

立つやうに奉納する

これも餘程の痛事

なり。

勿論何の願もなけれども

このやうに奉納物は

成程浮氣な

沙汰なり

「ちと急には出来かねます。この間

は吉原の櫻の提灯を

致して居ります。」

いぢやうせん



艶二郎芝居を見て、とかく色男といふものはぶたれる者
 と思ひ、頻りにぶたれたくなり、地廻^{じまわり}のきおひを
 一人前三兩宛にて四五人頼み、仲の町の
 人高い所にてぶたれる積りで、
 茶屋の二階には藤兵衛を雇ひおきて、
 めりやすを唄はせ、亂れ髪を浮名に
 梳かせる積りにて、月代へは青黛^{あじない}
 を塗り、揚屋町の銀出しにて
 さつと水髪に結び、髪^{かみ}を
 握むと直にばらくと
 ほどけるやうにしてぶたれけるが、
 つい擲^な所悪く、片息に成つて、
 髪梳どころではなく、氣附きけり。
 と騒ぎて、やうく氣が附きけり。
 此時餘程馬鹿なものだといふ浮名
 少しばかり立ちけり。



「切落から罰
 が當るといふ場だ。」

「うぬがやうない、男がちらつ
 くと女郎衆があたつてなら
 ぬ故、おいらもちつとや
 きもちの筋だ」といふ

「辭はこつちか
 ら注文ていは
 せるのなり。」

その握
 拳が三
 分宛に
 居るに
 ちと痛
 くても
 よいも
 随か
 の見え
 分るに
 頼むに
 頼むに

艶二郎世間の噂するを聞くに

金持故皆愈でする

といふ事を聞き

急に金持が嫌になり

どうぞ勘當をうけ

たく思ひ、

両親に願ひけれども

一人息子の事故、

決してならねども

やう／＼母のとりなし

にて、七十五日が間

の勘當にて日限が

切れると、早々うちへ

引き取るとの事なり。

「望みとあるから
是非がない、早
く出て失せる。」

「願ひの通り御勘當とや
有難や／＼。四百四病
の病より

「こ
れは
若旦那
の思召
然るべ
う存じ
ませ
ぬ。」

▲金持程辛いものはないのさ。

可愛い男は何故金持ちや。」

藥研堀の

名ある藝者七八人

艶二郎に雇はれ、

勘當の赦るやうにと、

淺草の觀音へ

裸足參をする。

成程裸足參といふ奴が

大方は浮氣なものなり。

「えゝ加減になぐつて
早くしまはうねえ」

「十度參り位で
いゝのさ。」



艶二郎は望みの通り、勘當を受けたれども、母の方

より金は入用次第に送る故、何不足

なけれども、何ぞ浮氣

な商賣をして見たく、

色男のする商賣は地紙賣

だらうと、まだ夏も来ぬに、

地紙賣と出掛け、一日

歩いて大きに足へ肉刺を

出かし、これには

懲りくとする。

此時大きな酔興者

だと餘程浮名立けり。



「外を歩くと日に焼けるで、あやまる、困つたものだ。」

また惚れたさうだ、色男もうるさいぞ。」

が通る。みんな来て見なさい。」

「ラヤ鳥羽繪のやうな顔の人」

市番れ販吹仕

艶二郎愈のりが来て、かれこれとする中
 七十五日の日限が切れ、うちかたより
 は勘當を許さんと毎日の
 催促なれども、未だ浮氣を
 し足りねば親類中の
 とりなしにて、廿日の
 日延を願ひ、どうしても
 心中程浮氣なものは
 あるまいと、手前は
 命も捨てる氣なれども、
 それでは浮名が不承知故、
 嘘心中の積りにて



さきへ喜之介と思庵を

やつておき、南無阿彌陀佛

といふを相圖に留めさせる

注文にて、まづ浮名を

千五百兩にて身請をし、

心中の道具立を買ひ集める。

對の小袖の模様には肩に金挺、

裾には碇、質に置いても流れの身

といふ古歌の心を學ばれたり。

これも中宿山崎の儲もの

なり。

花籃が藍いた蓮の繪を大奉書



から
措とは
おぼしめし
いと思召
附だ。」

浮名はたとひ嘘心中
 にても外聞悪いと、
 とんだ不承知なりし
 が、此案じを首尾よく勤めたあとでは、すいた
 男と添はせてやらうと、由良之助がいふやうな臺辭にて、
 やうく得心させ、此秋狂言には艶二郎が
 無利足にて金元をする約束にて
 座元を頼み、櫻田にいひつけて、
 此事を淨瑠璃につくらせ、立方は
 門之介と路考にて舞臺でさせる積、はたきさうな
 芝居なり。
 もとより素直に身
 請しては色男でな
 いと、驅落の分に
 櫓子を毀し
 て階子を掛け、二階



「二階から目薬とは
 聞いたが、身請
 とはこれがは
 じめてぢや。」

から身うけする。

内證^{ないしょう}ではどうで身うけ

なされた女耶故、お心

まかせになさるが

いゝが、櫛子^{くし}の繕ひ代

は二百兩で負けて

あげませうと慇心をぞ

申しける。



最期^{さいき}の場も意氣^{いき}な
 ばつとした所との
 事にて、三圍^{みつゐ}の土
 手ときめ、夜が更
 けては氣味が悪い
 から宵のうちの積
 にて、艶二郎に勤
 めたる茶屋、船宿^{ふねど}
 碁間^{碁間}、末社藝者共、
 太々講の送りのや
 うに袴羽織にて、
 大川橋まで送り申
 し、多田の薬師の
 あたりにて皆々に別れ、艶二郎目頃の



これこれ
 早まるまい、われ
 は死ぬための心中
 ではない。こゝへ
 留手が出る筈だ、どう
 間違つたか知らん。
 着物はみんな上げ
 ませうから、命は



これに懲り

助け、もう

■お助け、お

「どうでこんな事と
 思ひんし
 た。」

願かなひしと心嬉しく道行をして行き、此處こそ

よき最期場と箸置の脇差をぬい

て、すでに斯うよと見え、

南無阿彌陀佛といふを

相圖に、（おぼろ）稲村の蔭

より、（くろしやう）黒装束の

泥棒現はれ出で、

二人をば真裸にして

剣ぎとる。

ぬ事は御座
りません。」

「此以後こ
んな思附
はせまい
か、せま
いか。」

「わいらは
どうて死ぬ
者だから、
おいらが介
錯して
やらう。」



仇氣屋艶二郎 みち 道行興 ゆき 鮫肌 さめ

「朝あしたに色をして夕ゆふべに死すとも可なり、とはさても

浮氣な言の葉ぞ。それは論語の堅い文字、是は豊後の

やはらかな肌とはだかの二人して、結びし紐を

一人して解くに解かれぬ疑うたがひはふしんの土手の高見たかみから、

とんと落ちなば名や立たん。どこの女郎衆か

しらみ紐ひも、結ぶの神もあちらむかさんしよ醬油しょうゆの焼鰯やきいわし

びんとひざるも今は早、昔となりし仲の町、外八文字ぐわいはんもんじも

斯うなれば内七文字うちしちもんじにたどり行く、涙にまじる水漬みづぬに

ぬらさん袖は持たぬ故、下の帯をぞ絞しぼりける。

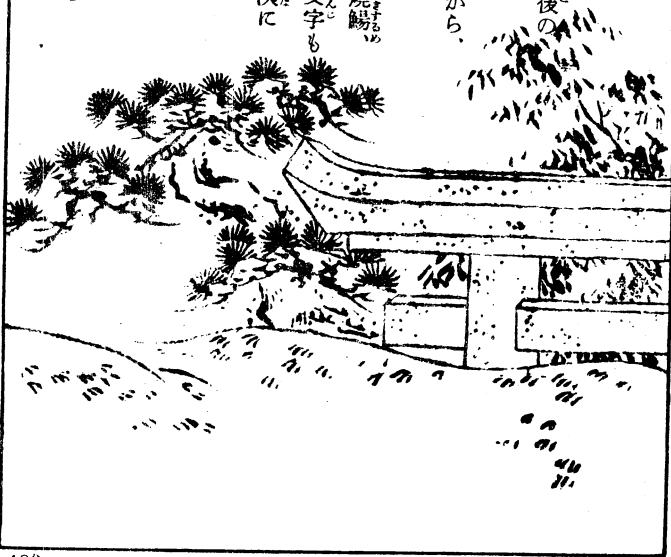
身にしみわたる東風とうふうかぜに鳥肌うはだだちし此素肌、

殿御の顔は薄墨うすすみに書く玉章たまづさと見る雁かりに便聞べんもんかんと

書く文の假名でかな挺裾模様ていそもよう、ゆかりの色も

七つ屋の名に流れたる隅田川、互に無理を五百崎いほさきの

鐘は四つ目よつめや長命寺、君には



胸をあくる日の
まだ四つ過の、

緋縮緬、禪ながき

春の日の

日高の寺にあらずして
裸の手合急ぎ行く。引三篇

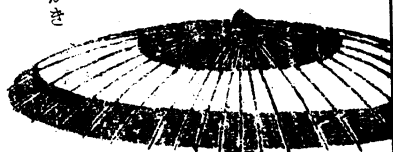
牛は願ねがひから鼻を通すと、

艶二郎が悪案じの心中、

此時世上へばつと浮名が立ち、

澁團扇の繪にまで書かいて

出しけり。



「おれはほんの酔興よきでした事だから是非がないが、そちはさぞ寒からう。世間の道行は着物を著て最期さいきの場へ行くが、こつちのは裸はだかでうちへ道行とは大きなうらはらだ。緋縮緬の禪がこゝで榮はえたまをかしいく。」

「ほんの巻まき添そで難儀なんぎ。」

艶二郎は丁度勘當の日延切れれば、

怒々として、うちへ

歸りて見れば、衣桁

に三圍にて剥がれた

小袖掛けてある故、

不思議に思ふ折柄、

立出で意見する。

ほんとうの人となり、

浮名も男の悪いも不承して、

外へ行く氣もなく夫婦となり、もとより

身代に不足もなく、

末碁石の榮、

しかし一生の浮名の立ちをさめに、

今までの事を草雙紙にして

世間へ弘めたく、京傳を頼みて

世上の浮氣人を教訓しける。

若き時は血氣いまだ定らず、

誠むる事いろ／＼ありといふ事を知らぬか。

すべて案じが高ずると、皆斯うしたものだ、恐ろしき。

北尾畠演

京傳作

「わたしは
大に風邪
をひきました。」

一間より親彌二右衛門番頭候兵衛

艶二郎はじめて世の中を諦め

「泥棒と
まて身
を棄せ
しわれ

「こゝで
やきもち
をやかれ
ては大難
儀だから、
妾も何處
ぞへかた
つけませう。

「以後は
丁夫の狂言
きつと

「喜之介や
輪留井
思慮とも、
もう附合ふ

「喜之介や
輪留井
思慮とも、
もう附合ふ

「喜之介や
輪留井
思慮とも、
もう附合ふ

「喜之介や
輪留井
思慮とも、
もう附合ふ

「喜之介や
輪留井
思慮とも、
もう附合ふ

「喜之介や
輪留井
思慮とも、
もう附合ふ

「喜之介や
輪留井
思慮とも、
もう附合ふ

「喜之介や
輪留井
思慮とも、
もう附合ふ

「喜之介や
輪留井
思慮とも、
もう附合ふ

いふ心氣の者があるて」

いふ心氣の者があるて」